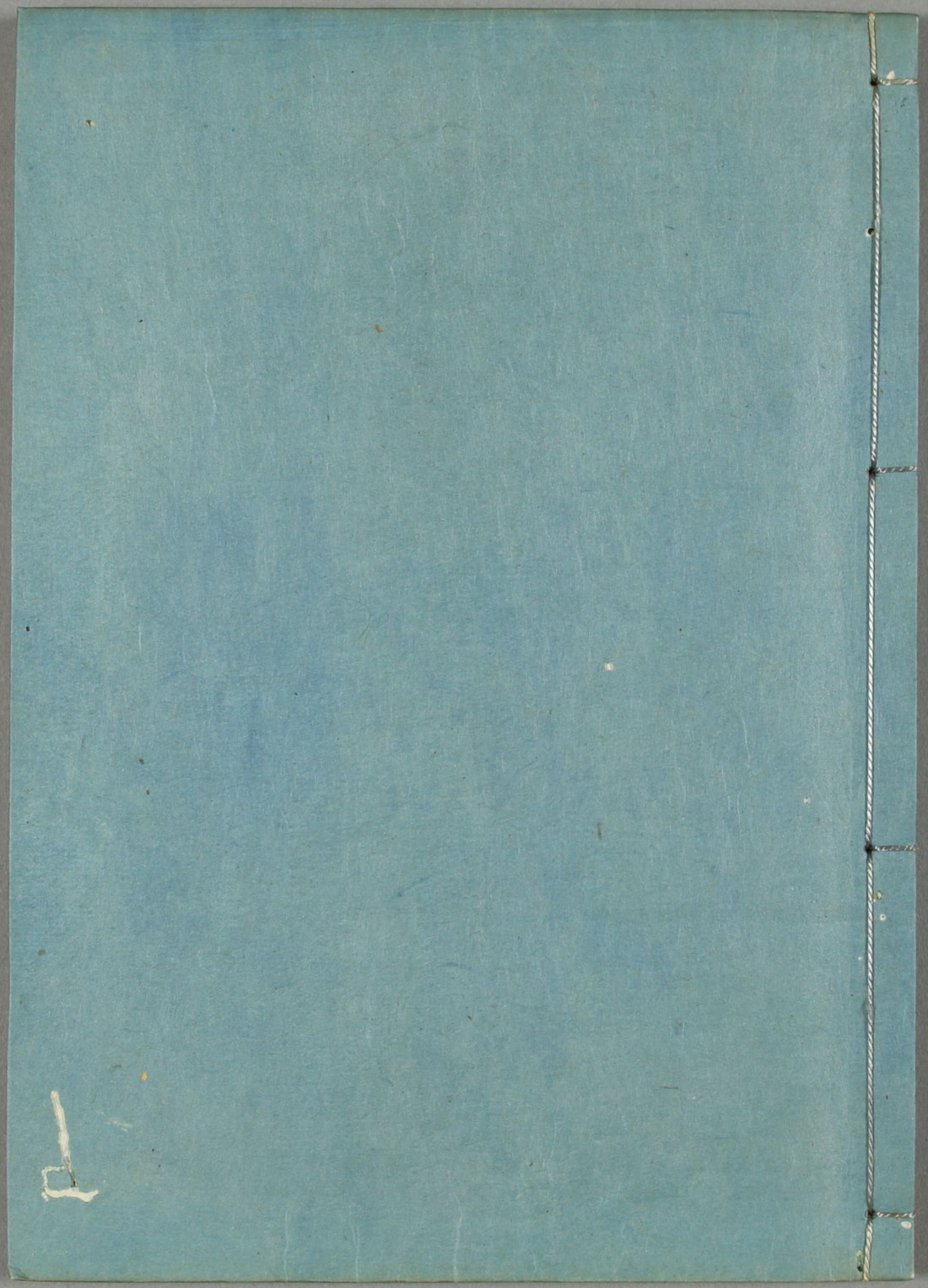

耳底記卷之二

出雲口義

光廣記之

寛永四竜集屠維大淵獻歴

二月二日に丹州へまゐり給はんとむく
りもれいるまでゆりてやどをうひ
てあらる三日うまれ出られぬ。まあ所
伏見よりうめたるくのがり給へさて
はまだたちてまゐり給る路まて乃雑後

一 定家卿ゑ歌るのぜうさかさ歌
がめさ歌くものて京ゑのわてゑとわさ戸よりわ

出るやうなるがおかしきと俗歌のようにうたひ
ひろ歌の外にうたとくちよみ入くも歌のうたにて
なるべきもあるなり。是ホなどい面白まりるべき
金言なり

一同云　名所歌　　堯空

先達をけとなぐさ日あるぞ有ふまとの尾上の
うやの笛の声。これい有上の名うの笛のなく。
といひさうなる奇なりめり
春こしまくこそ奇いのぶき
一ものの番みとうくに風をもくるる　立花奇
一美人をいあ人とも　立花奇

同月十日

一同云。八雲所物。用捨は外
春。定家の歌ふはあるもあるとうく。御ども
大旨用はも
一同云
下もみぢかつちるあのゆ山ぬあ色てや
ひくわ志のなくるん。文志のひくわるん
とあるなかの心ちぐひ。ぶいづ色よくはや
春。定りの志のはるんとあるよ。心をあ
一夕ばくひなくびの暮たるいあ月と日なり。

たづぬ。夕日乃もやに

同月十五日　於伏見

一定家卿嘉隆卿等の人々歌ハ奇特なること

一関東陣所の時富士すそ奇をとゝまんとゝひて
出来とゝらへてゆかなりさてみまばまどり皆
ちぐみたりあそこみくみ　和日さんる根の
流者定えれくたちを及だぬ　乃川蕃これ
奇いちはしらくおろ富士の裾をそのまく
よみとり田蓼浦ようち出くの奇などいちの
境界なは。あよだぬるなり。此次ぎ。たどの間ぎ奇

をとい。何ぞとも紙もうりてみく。びくらきを
皆とりのをく。よみをる奇なり。ぎまくこち
がよ南をとれど。あちこばみのよ如こ。はく
といをく。面白き系ぬ。ぎ極妙也

一集へいまさ面ろ奇紙をしてへるのみこ
先古今の奇ふ

吹ろふ秋乃ま末ぬ野ぎ山田
をあしこのみん。是を他者ハ野ぎぬ末ま
とよみをり。ぬををしをあをを。しをを尾
秋よなるこ。神ども。中ぬよりさる奇ゆ人秋乃
紅みいこをく。婦花ぬをいぎをり。尾を煙

の歌なども出をそろへたるぬ事也

一西行が哥よみすてしはべりてんいづまれ集
まも哥数おりく入まり哥ばかりひよひよんな
やうなるあまどもこうく哥よみとうてこうり
一三代の撰集。いづれも古哥ばかりして集へいま
られこうり

一人のこうぬをつくるさがるいあしき歌とし
まをいつものなかでこうし。面白ものぬ歌ぐ。或古
めづらしき。歌をよこあどもるるもし。まぎう
うものなり人の歌をもるようするトなるも
一　さまばこそ花うあるもし歌分ゑ

といふ歌をこうろ紀貫之。紀貫一。紀ありく
物語の歌句れ歌用ありさあれむ人がこうこうて
何きこれなわ。よれ年ぐ人をなうべしといふ
式歌句い歌よをきあるる文字をきた。菊なり

一大まくこうこざれ。仏ゑうを習うれども。いまざあぬ
ありいまでせぬ狂うもちやうをまづきや。
こうこうく用ゐるあきなわ人のこうてあるこうき
やうこうこうあよ紀なり

一うれこうきといふ句。あるくかあぬと三光院殿御
ら連歌の者我ようみこうる時　うれこうきを
あるくつまむこうく後こうとゆこうよたてといふ

まことといわるべきなり。ものとしかつぬ朔なり。
うわついとしつの用。せうくうきうしいきんぐて
ひぐいなり

△一 いりそうぐふ笛よ。あくさんの つまりぬ風うりと
ゆるるなりわがきしゆゆるぐくるぐくて
とあきてゆき。さてうれまてあること。ぐしきをみとさた
寄色強り。まづ笛白神。表雲神。長高神をうく
るひきてく。或ハ強鬼神なりとも強力神あり
とも。いづれもうむべしなぜよまれまいこと。
これきうくるの習也。笛をうみうさわぐゆうよ
おくりなり

一 おりひいづるありたく笛乃クメをうりむぞぶ
色うわうしきをぐくうみうり。はず表陽しのうれ
ぞうみ出る。名器なり

△一 ゑといつのかたにもあてかうしくかつ。さる
もおりうきやうあよむとあるものをみて
あり。此神をまづくくうきをくうぐ

△一 神うこれちぐるむあるぬうふうれ
これを表たまりうひりせぐ花ある野とうへう
けくくよ。きてもうべうるむり
かくくして乃用い
一家陰乃弁わどひうんあとのなうさういあ

一家隆卿のいはく白たへの
　ありけるみるめ白べきみるわやそもり
　月のもとまつ〳〵をもみるべし
一　同云定家卿隆卿の歌に花鳥の
　答ゆゑりやそもをもしるべ
　次に定家卿の歌八十首あまり
　きゝぬなり
一　同新古今花をもぐ歌ゆゑ
　てのもとに又十そ乃ゆゑ一首くゝまとり
　奇なるといふのよしなり
　芸古今花実お通の集

一新古今花をもぐ歌ゆゑ
　為家卿中をとりくゝ後撰を
　花実お通乃集なり百人一首なり
　おもし

一　同つきなきを
　き人をといふこゝろ
　めをくなりかゝるべきや此類あり
　答奇乃つゝをやしなへ人をとゝ
　あるまはもこゝ
　白と引とのちゝひ
　ちやあるとし

給ふいとの外きゝあるりと世ゝくの乃御已者ふ
なをぐしめみきこゆ。幸こいよ始いるりのと
さりあゝてげかゝるものなり。五乃うをむ
げゝゝみ點をうきゝれあり
玄旨 五乃八しかのうらもそれとみよ世の雪
うるのなゝうぶるゝ移ぐ。八八を多みゝさ菊也
月 灯もるを立をの雪れうへう秋の七日元
かゝまつゝん。禁中ゝ七夕とまゝ移くと紀
灯九ワたりゝり
月 めゝ多ゝこうさ世乃幸やさめぬゝんゝ元
ゝのうゝをまりの嵐み。小爰さ元ゝのんゝ夫夢

と。生死乃移ゝり此さむゝをいふなり
月 うゝのめをゝう秋のかゝさのゝり花を
乃みゝむまゝ此下風ゝ面白とゝゝ
月 ゝ引乃ゝの者いゝゝゝとのれ
ゝをひく名者ゝれ。嵐といふゝうめゝゝゆへも
みゝのゝゝの出ゝも法ぐゝゝ
擬露
月 ゝさつゝもきゝえゝやゝ移さ此ゝく
ゆゝげまゝさぬ花の乃ゝゝゝ
擬梅二ヲ
ゝゝは人ぐゝゝみいゝゝれくゝやゝ此ゝの

梅ひさうるこ乃うつうもあ者
ゑ〜の奇いとく合ひをひ。なりきし本ゑ色大
方よりあるを。さゐを花れどもらるーかるぞ。うゆう
みとり者ゆ者ゆいとぞ一おあ〜きれだかきゆ
のくづきるやゝあくゞこをゑぐくるゆりて
なりきなり。ひ奇。やこのうちゆ出そう白い
ゑよとゝきぬものゆり

一　山吹花蓋

光さゝぬよりちるとぞこうる山吹色いまの乃あ
乃蓋花あゆ色一段ようきゆ生ゆ面白く
私云。奇ゆどゆるまゝ歌花を所

[illegible]ゆ
あてゝ。連奇いよゆきゆ前白ぶ花ゆ乃のごく
ゆはよゆるきつきんとゆことの行ゝ出ゆ只
今まで面云ゆ花きくなり長源ゆるものを
乃ゑゝゝり
私又云歌奇乃ようゆ行奇のんゆをひゆせず
早下ゆゆゆゆゆ。道者とみゑゆり

三月朔日　春吉田

一花をまゝるといふゆ花まゝゆ身ゆゆ。ゆゆ云い
ゆりきゆ。ゆ花ゆ人ゆ色ゆ出ゆ。月いふまゝ

をそまとをその家へくるたなり。月いまる夢
いまぐとは。八乃家いいぬるり
一毎月拝。定家の拝。安定なり
一毎月おろ。心乃うをあるんろいい。御乃うるる
みくくていたあとい。んのうけるをとどのつ
さるるさうりも。花あるきなりといふん
一春花盗賊
むぐ〜ぎぐへくく拝でおるたくくみるる
あるさちぐりるる〜移だ。ひ辛うけわひくくり。
みうけのひよかまたぐ。するるといひるぐして
するるといくもあり。いろくよかるこ。さりるろ

大音うけあひ乃なるあり。まづうけなひ乃ま
よりれるり
一同。よしはるぐふ兵乃御まてい小又意あり
答。ちくずんいうしはるぐ乃り
一春月
みぐもあるずんもをぬ三九月新乃ま明
乃年をるあくしつ。ま。はりるぐ。
年年のをきお乗。うんくるるよたも。勿海くるみき
でいなすきるり
一同。まちくふ。氏御。ゑうあるたくひかくぐ
ひくをるくくとも。まつと云御とうくくと云御と

あらず。ひとうまうしてうむべきなり
者。まちうるといふ紙。法るる事なり。事うり
あるうるとうず。紙以舊可用なるべき。たぐふる紙羽
をまりのうべし。これ大切乃義なり
一水乃うしとん石のうなり
一こうぞともあく。事もあることいふこと
一法やく。法うくるどいふ紙うあるべ

同月十四日　參吉田

書狀法乃。書籍の自線紙也乃法
をとみえあり。うりれことよくきりみたるる

ぶあり。者所部書紙筆者乃多たるされり。
又あんものあり多たるされり。此時和あれ
色筆といふものあり。ゆりれいろたとよ
むなり。紙。うるのたるえうと事紙
一新撰筆筆い書相筆乃のうる紙なり八重山紙等

同十六日。春吉田。本周防など者く事所
ゆ。八条殿法一巻りでくみ紙紙
一度ずつ不寄を向
搭書法
曾仁
ゆく法をあしむといふを花るの多者

のあらん限やいかるき　やりなのり

一うらむることなむ。なをとりのきるとうみへさるよ
きなりくるでなといふ。海者（まなぐ）ふ者（ぐ）ふ者をとりたる
一番なをもむるあるあり。ひと氣をひきくるもの医
一まよまんとをうらうやうよりやうやくの者でうくる我
きぐちぐふなり。さうしゅをもむるなりぬるもの
なり。まづ一番よりむぐ。さてちぐ。ひとをおさ
むとおもふくうれうり遠慮のわきいあ案ぐし
一ものいふ一拍よなきものとを白へてき
てよきもあり。又一向てぐひぐくるもあり。いひ
のうくなきをるよるるあり。かのくう

うとは。ひくあらきあぬものなり
一ようきものといふもの。まきるみよとみえくり。節者
大概のうちのを。おれくもこまくもへきまるふ
ものわ。和者乃風俗おどりもわ風俗をとつ
てきうえ
一あぐ者いふ。西風俗ふうぬもの
とみえくりいうくまくり面をひく
よむを。まぎうかくものもぐみすりと
うをくとうぬものも
一番いかなをとうをくいくるなりう者
まきうかくなわ。あぐ胸中よりそひうたる

が頂上なり。古今序にいはくやまとうたは人の心を種として
てといへり。うまれ
一まりうくあるもむ肝心なり。あるてうらく
ゆきあるるよりたや
一そもそも正風体あるもむるものたみそうり
ねのトまりを。きさめくぢまりをとうむ
けいでんでめかう。きさうくいあるこべうすう。奇
を見よおもでいまづ正風体をうみもるべし
一定部内ある。十首が八を九首を。えきうぬなう
う迷も集へへあるい。きうあるうり。やもうきゆ
うれも。きうゆうが。よけきでこそ。集へうへうめ

一見をはくもうべしきうえやをうきうたりと
向。抜句なく。鳥もあるき奇めあ
鶯。鳥のあるる奇よりハをとるなり。雑のあるる
あは抜句をやし
同会 脇
よひとりぶあるもの山声。山乃ごとく
よ。ねうものとある。やうなる。うくつきてうく
ゆ
鶯たうり。まるさあるてもや。一句なうん
同うるにとうそうも。奇あり山人うさで
春まりうくる。正風体うりうむべし。古今うごと

よく見さて新古今の代まで遊遊院殿などの
哥のさまくみえべし
一系でうしあるべうかりぬべくとぞおもはれ
もしかるべきなり
一惠子院殿古今傳授のとき封をつけられしく
もちたりしもそうまとも封をつけられ
をきくつ切えぞ三光院殿傳授の時の代さ
ひらて封をきりしもそ三光院殿さてこのとき
くそんぞそうゐ人じやうきどくふ道をとれ
ゐひそうたりとそ二條くんじゆしなり
哥をきくしひくえうりあまりたる句まこ哥をえ

再よ哥をこそ哥ようきとありしは句も哥
でわあくあるまきこゆるなり哥といふ句をとと
ゐくさけしきうき句やうん
一 哥ノう哥傳をもとあすぐんなりまづさう
むとうもむべしきてうは傳をりとめよ
ひ月ぢあうよゐをとりしきるなり此きこゐ
くれ合点なり
をるものなり哥
てのゆゐくはしまげうけきくきとれ

をよりあつまりてこべし

一紙にもとあるべく心をつくるなり。かゝりよりて。さてそのとがりをかぶりもむべし。是後方の口伝乃一なり

一　紅云　雪銘

なづ先つる美いかゝ（ナニトミテナカメツアサキ）ものゝいまことゝ（ワ）ふまくべ

よ花さく雪の所をぶ乃　智仁八条殿　雪乃

あうりゆ。上白をなるゝ幾とれ　ゆをしなり

ゝとみえゝり。陽春。ゝゝくゝとおぼしぞ

紅云ぎゝりも

一　同　月前花

一　同　月花

ゝ花ゝ（ニ）ばゝりを陽ゝくゝ久ゝゝ乃月（ソラ）を

ゝゝぬ花乃（カゲ）よゝれ　月見も紅を雪のもたし

ゝふおぼゝぞ。おをしゝ（やゝれおぼしぐゝりも）

一　同　ゝゝ乃えよ（キミニオフテフ草ノ名ヲウキ身ニ）おゝて雨美を物おゝりゝ（ウキ身ニ）

ゝつる美の曙。雪云ゝ乃とゝふゝものゝいゝひでい

ゝゝゝえゝものゝとおぼゝ。ゝゝゝゝ。美れあをゝの

乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。　光　紅云

ゝ陽春。紅失意ゝゝゝゝにおぼゝえゝぞ

一　同　八条殿仰乃ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ海ゝゝゝゝゝ

ものゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　同　陽春ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

を行ふ。遊ぶことをつとめべし

一 同じくみうの業をもとめむまもまぐさをとべ
のこりの秋べの海雲よ。歌云春も海さとい
ばぐうぬこ。まこもおさいと結ばげけこ。すゑと
おもひくるあん。 ヲ云下白へ乃ばぐくあぐか
おなきこ。歌云。いやかるもありごとの何迷でも
よくばぐうぬなりこ。一向をれこくこをもわる
ひれこのもようくいあばぬ。まもまぐあさ
とりの海ぐまこをたしこうまばぐこり

一 同 物為の後ニ
紬乃うんのまこをかあうあ花さんをちこ

一 皆云古今巻一書二と。法華経ものであることも
ぜ。書之一書九あどくよむるり。さるけまで合
点のはうぬ書のり

一 古今乃真名序玄宮下ゲ所より不用

一 私云。智仁勇乃うちうきくぐまとこ
毎うかうの所あり。いのまもこなきとこ
やこの物語乃り

一 肉見月ノ
あくるの物乃人をこつあくみう用まあり
こまあう私風の名。私云此勇乃みこうず

長なり。さてしうふ色を見てこうり面白く

同廿一日　勅を拝見酒ゆへ拝下私宅より所
遠為りあり再筆

一日ムラシ乃酒といつてくりあり此酒の名一ツあるを
るくて名あり。此類あり。此やうるとばていど
日ムラシの酒といつ屋うよりあるもの。たとへ
ば。ちんたとやらして。日ムラシ乃酒此方ものとうる
やうにみよりむものし。後方此口伝の一ツなり

一四方といつてくゑみを後ろれば。三光院殿
四方乃うらよ。おるあるいとらを花を
参る月宮もとうみをとうみをとうみを後てるかく

のうまうみなり

きくを花も紅葉も月雪も摘が枝
ふしてくしてぞみ家。此奇花といつが題じく
乃色の多此やうよ。きこうあるこ。あくれ紅葉も
ゆて此花ならと。二形
一形うり西ちひくくよむまと。まつひくくうるさまみ
酒ゆ。まつ水とうる新よりて後京極殿奇
酒水をいうり月乃ふさらてこうし
りのこうばくん。かゆうゆ西りうるの
花とうへど。湖上乃ものとうる上の家。又此位乃酒の
字などをもうるもし

一 志ゆさいは志ゆげにひとりよみてよむべし。かやうの此
頃このむべからず。勅撰の哥を見てよみかへるやう
のめづらしきハおもしろけれど。秀逸のうへとう
さゆうゐるなし

一 名所よみならふとてもきぬまのよむる事。其人の
てきに見てこそ眼前にうかぶるやうにこそあれ。清哥を
よくあんずして何事をもよむべきなり。習也。
但し短く詠むを其所に有よく似合ふこころの心は
清哥をよむるにおよばぬなり。其の哥仙沙汰する
事あるとて。衣笠中納言乃哥にてのさうさ也

白露乃たまかさ乃此女郎花はなかれ

きらけさの名誉ぞ。かやうのよみならハ山々かる
しからぬとや。其外月雪雲霞などいふもの
いづれもおもしろきものなれば。よくおよばぬなり

一 ふることはふる露とハあるをかむとハせぬ也。其所
の名なりて弥用の道なり

湖上霞

明日こえむとするのやうなのひとりてむ
ひまより出る舟人。此哥からにもありとハおほき
どかや舟の正体りなるなり。さそかのかえこ
なるなり。かやうにようとよみとる。これかしこそ
きくゑとつるべし

一 問 ちるといふもちりてあるのみにはあらずまひれ
答。仏のうりよりてあるべきなり。今ちるまで
うる。あるもちりくあるをよあるるあり。宗祇
発句あり
　ちる花をたれがしかへも嵐かれ
是は。多くある花の事なり

一 問
　同廿二日 於吉田二閑談亭見廻感悦也同輪
　　吉田二位兼右大老
落葉浮水ニ
　つもざしよまでこもしらん水上にはちりなり
ふくみの何しぞ。此御歌嵐の風とぶる

問ますや。又歌んよおもひあるますや
答。たいていの今とらなものし。よき此不絶落葉
をみく。んるよおもひさる作者や
落葉といふもののよみぬくきものなり
　難波ぐさみじかき芦北ふしのまもあえ
でこのよをすぐしてよとや。此やうりいかよむ
事あるべからず。世くずりあるなし。このごとく
およびぐるよわるよのぬてもあり。又むかし
いかにみよみ尽さども。まろくてさらぬことも
ありまくさや
一 問
　西行の人ら道ある花を

大きさはあるまじとはみぞ侍むとうんん人
をさくみつけくも。光廣はうさぶ文字まよ方
まとはあまでぐも。何ものれとんみぞさてむと
いみつぐきおもらくもあるまじきれ
若。ふ多一かうず。一版よのさ寄くろとあさし
一清ものふ。四十未満ふくさ。古今傳受ありとゆん
ど也。定家ゑ十六ゆて乃傳受
一基俊。奈良乃菊亭堂よ寄乃をいのきれな
おりのふうせん清出あまもの。藝道をかうみ
まくり。さて嘉義よ菊ゑをきじ。碁とゆ
もれよ嘉く。さて山がらしのゆよ。あくとやん

いものの。貫之が道を傳ふ文さうる紙てくられあり
一家易ゑ。つちのものいろひろさよ。ゑ乃ものゝ
せどくさりよさなり
一六帖乃寄。藝してみくいくぬものあまぐ。連
寄なぐの時。人乃自のあへらひをせんあ
用ふけぐおきりもる浪きてる山よたう
や君がひとりゆくん。立田とゆんあよ白浪
といひ。白波とゆもむくあよ用ふけぐといやし
ゆ寄。拾八乃八の字。もむ。習こ。傳報。自筆ゆ古今
乃中よ拾とゆ字をつけくきてくり伝ふよ
拾くのこもむをなる乃。風興拾愛とゆ本文

りんわうのようにてなり。一ツ乃習也

芙蓉にてをぎみる。伏見の宮の紅葉と月雪も揃ひ枝
よりたらしてをぎみる。伏見の宮の紅葉と月雪も揃ひ枝
もあんじくるふり菊と紅葉をとなんん
ちらしてはいりこ

一定家ゑのまれをつくり。家隆いうさよみなり
云有ゑのとちくるやしむ
家こ乃集をみる。落こびる寄れるさいの
家隆のかなり

一ゑ家隆のちわひふ拾よくとあくきこえ
ちりさまでとも彩勢探よ。家隆乃ゑをなきへ

らまてこり。ゑ乃。ゑ家乃きどくなりなひさえ
ちちさを彩ちさ社よさいゑ鬼なの

一稱唯と書くいせうとよむ習也

後三月九日　伏見ぎうそう院へ参る

一　向　そたてわ生やひ乃光ちくまい花乃
ちあなる日数ちんん空といふぬもの
あ一かゑへき乱
答ちよべうみんなし一かやうもあるくよたり

一古今の前書ゑ寄ちてまきとあわをそれる
附とあこ乃いうさたあなるたくまきとあるのこ

絶よまり。中まもうきをせいよいまつく。みる習
なり

一月お書よみくとある。とよんでとよむ。習なり
一月かのちりぬむのちぞうは下ぬ乃手
不義なり

一月　ぬきつてそ為ぬくりつとし乃月よ去
を つくりもかしどとおりへだ。はかお書よやよひ
の作ごおりの乃日。面のふりきるよ義の花とおり
て。人よつくりたまとわり。面とつふとも。むとつふ
ともおり。今いふやうふよむべしずふに古今
おわきだとくこれを俗持りそんべしば

月十三月　奈吉四

一天神乃作百首とくわり。者しくなりぬなの
奇おれとやうをくるや。恵別　天神乃奇をくし
めなくといふ。古今みくさくあるとく

一　恋をそ人目いまぐ記之よりく人を
きまでこそおもひそめ。ひくめ乃字をむなり。雅
のくろうわらず

きの乃ふこそされくとり　くつ乃まにいるだ
いなづ者秋風でふく。ひく乃字よ月し色を為ら
みるなり。そむがよ記なり
千載新勅撰続後撰。これを為乃三代集とい

習なり

一三代集のうち奇くしきすがたなりとく。千載を
あまのはしたてとなりとさて彩古今。花をぎ多りとく
彩勅撰を定家乃くちをみくたのまきなり。あ載
新勅撰乃中をとりく。後撰を為家乃撰せ
らまてなり

一心風弾物をく我能よりけてみがき習し

一向。月心病。日文字病。乱思病。渚鴻病。これらはや
まひなば。去へきさまや
答奇合りてあまたくしかるへしなど。定家乃
うさ絶ものあまを。嵯峨やまひのさまをさるわし

きとあり日文字乃病の慌奇ま
こやまひは物の名をにきくあくみるやこい
野道のうられつきをにきくあくみるやこい
へるる奇あまをじ何しくいあるべらず

一向縁乃字をもひすてよをたるるよるさまや
答ものくにけるかさし。為別るひて物法はあり
ぬものなりよのみをるをみくるうぢやかうぢや
と。せんさくをさるるぢよりたりえんのまるさく
ふありてをよる紀奇あるさなり

一悦月物い用物あるものこ用物あるものべんてるが
何きとこ三条院後。あ月物をるをを用物を芝

きらるるなるぬかりなり。なんにをみるべきよさうみ
ぬ。習ひのみちとんてうり

一　同。上句下句を。定惠乃二。天地をとゆあるとと
ゆる。悦自おうりわり用ゐる
者用ゐなり。きりとそうきをあばくていくぬこ
となり。奇妙なるあよるべうず

一　さくら。月乃花のといつるりんをはるがるる
なり。その上よ。無常をゆるけるくるをよむ
へし。うれかをそひろくくあてをいるぬるこ

一　同或人あつばだをを。王げいとうむあす
者なし。なつぎぞとうむべし

一　蜀漢よ用ゐるものをみるべきなり

一　おりひいるまるくてを年乃へあるうれも乃
いひくそせ秋乃義の月。はぐくるにのてをなく
きこゆる。そうとをきるがよきなり

一　義経をみくいかりがひい今ぞ弱
ある秋ぐりれうへよ。はるあをぐきていなんのせん
もなし。夏を光信をうへくみるあこうをむ時よ
いんであるが。今雪れうをよなくなり。きそを
光信乃ぐあさよ。人乃そ後ハはぐまるぬあの
なりといんなの

一　そよ乃みうきをうあるず

同廿二日　歌所始く来る

一　同五日賢淵ハ歌流ゑ用ゐ外
歌道流り用なり。三光院殿乃云。あまの作
てをのこ。文をうるひもぐしして書る
ものなりと

一　百云。一首百首なども色紙
みをぬがゝ紀と。三光院殿御自をきれうきて
うりうちれ自筆ゑ。用の時出
ゑるがゝ紀なり

同廿五日　桑言同河出ゑ

一　歌よみ。べき物。百人一首や。後代乃くあ子定家
えらひを。義行乃。丙くそ。稀乃。大抵乃奇
大神などなり。兩中吟。其記いあ。ゑひぐく吟
ゑぬものなるべくみくこのやうな風流なよ
ものくこくゑるべきなり

一　正風神物まるこをつきくみるべ。見い出く
中ゑもあゝず。一乃口伝なりゑ。定家此奇を
後鳥乃集ゑ。選ゑれ。後朱乃奇を定家の えらひ
きる。奇なるかどう。たゞや。作づ乃奇あくい
あるべゝず。えゝひゑ。奇の心を。内あひ。多夕
きくゑ。選ゑれゑ。ゑくあるえゝ。ゑ。ゑどう

よき句は頂上なるべきとぞんじ候へ共こゝろをよくくみる人は也。古人はつねにかくのごとき
なり。はるのなごりひはくれんとす
一この句では。逍遥院殿乃俳諧をみるに。むかし
乃ごとく奇ぬきとよむなるぬとのみ
又時代のちがひはてうこがあまやかなりたる
とも見へ侍り。時代乃別肝心なり。逍遥院
殿をよくくみるなり。これを代のる
なりなり
一後柏原院乃俳諧。逍遥院殿一段俳廛表あく
ありたるとなり。かしこ

ろさ俳諧どもおもしろきなり。今花集とくく
俳諧。逍遥院との発句乃事。百首ばかりあり
それをこゝにとゝるべきなれ。みるべし。今度乃
ごとくあるべくさうれものをみることもを
まいとおもひて。もちてまいるぬなり
一奇道といふものはものもちがひてよろこ
ひぐくはなるべくふまれまるべくいなるべきやうにぞて
なる人もなるまいなるべし
一奇合乃ごとくなるてうかうはいかゝ身なりむかしの
人乃はをちがはるべくくんじ
一 向云三条記定家化ひろ定家

答云　偽書なり。三光院殿よりたしかに家にひ
きたるなり。三光院殿。つねにおほせられしハ
偽書とみえたり。流布の秘書がましくてあまたを
まぬるゝともおほせき。流布ぎよ。さあるべき
とおほせられけりしなり

一　問云　変虫といふ草を申は外
答　かのうつせみを申はたなり又世にいとも申はこうふ
まよひの虫などをとると。変虫と申はなり

一　問云　野鴫の清濁いかゞ
いづれもよみやうによりてや
答　にごるなり　頌云のじ。例、あまの安房清濁。二所

りあり
何となる鴫がさきのいかりうちね
なく袖に涙もかけたり。とよみたるハすはし

一　問
千載
冬きたるハ一夜二夜をまへるさし此葉かけ
色のとさ纔をそへまで　定家　義理いかゞ
答　冬の来ていかどなきよ。葉の色ふしとなり

同
千載
かうなせんさしてうき世をなくさまじさ此
みし月もなごり　定家
答。のちなときある文字なり。月をみまでは

ゆるゆるがおもそれるぐ。みそぐうあつそ。けうあう
てへべらうまなくさむるすもなし。ゆうふせんと
いふるこうあり

一 同 新勅 ゆもとるるひの暮も雪とふるゆ梅
ゆれ去りなのをそ。嵐山のんあうべうずきそぐるべし。なうい
春嵐山のんあうべうずきそぐるべし。いふこそうるべしむべゆ
といふゆもとるるさと。いふこそうるべしむべゆ
用をなうしといふうんといふうるべひせ

一 同 新勅 久うるのかうみうるあうひ草そうれ

ひうりと来世なうるうん 義理いうぐ
春ううい月のうるうるべし。山寺入間ゆ
夢なるもで。寺井のんよう。れひうりやいふ
うるうり。えいうひくいうり

一 同 新勅 時雨つうそぐるかうぬ秋のゆ日ゆさそ
みひうのゆもうそむうの。ゆ寺方とうけ
ゆるゆうゆうや
春うし。ゆうぐるべし

一 同 後良撰 秋毎ゆなぐさゆがうれ月そとゆれく

もとるやそでをてりぬ。なまくもとるや
なれくもとるといふまてはいや
答とうるの。年高みんなり
一　向さる。ちや。ゆ月
答。年あけくまるこうべしとあるひさるや氣色
ありさるやりやま。見るさるやなり
岩ごの家う尾をかさしきてひとりや移色
ちよりやま。これいさるよ利とうるるちけよ
なり。そでさるやなり
をしま。そで尚。これくもとるよりく清濁の
とるなり。行為やか落といふとるをもむなり

月やなし波乃ものといふ時もしもべしたづいみづる
一　向
あまでの衣ぞいりのちよぬうを多月
みづきあるとくく。ひとてうあり
答きこえあり　私云牧不富
向　行為定意
うりゆく時をかぞへてしつて今いて
為をひとりあるさん　光廣　行為りんある
まづくいや
答うりり時をかぞへるといふくうれこてうる
べ。そのちひとるるさりの陽意のまい

もぢりのことも有し。さなくて此句よく聞えぬる
あるべし。此吹きこぼるゝの御句は。はやくあり
きんとおもひまでも。錦をかや。給ふそこを御退座
なりくずす。今度花鳥并遊。此所をうへしく
よみなをさせまうしを見るも大勢の付合なと
なし。かへしやられば。後の此句二段よくはし
はりげでもやしごとく。御句風情なく結句ありけ
ぐるかどなり。よみ始の語もじいやうなる句
よきみも句ありあるべし。さおもひく細もなきの
くれよりも雛を御よくやよく此合点なる
べしるなど気のわるをよくのりきづめたる

をよし。むちをとりなどするを用ひりたてぬ也
なりける句も見えはあらず。右点つがふ云。此こと此なり
をもやつかくしこらしも半分なり
「んあるをじまのあまのきせもとられ月やど
出とほめ出ぬものかつ　歯舞　面白句なりものかつ
といひそへある。おもしろきなりとく数吟
じ給へり
次云家々きのごとく。句はそとりく。終行をもとれ
ども。まづはようぶりとおもふよろしき一首もなし
まぎくること。かくしそはれんとおもふようなきを
自然なりあるなり。友部の御あそ出ひり

もれんとうの道なりたりとおもうぬなり
迷惑いふかき前句ぞよあるべきこれぞくる
させんとおもふなり

一 あをのそかぶのこぎめくるれたるまりたる
奇なり。はまりきるし又このの
ねどはげきの間よ吹たもるうるといふあり妻
さ間このやうあるとあるとくは笑ありしも

一 いろうせん立乃やしまに宿もが郭公
乃ろうをそこにまぐんん 此句ハまがれ
八潟をもとめる。さてやとをもとあるこひの
きみりを。はげんとをれとるもむろ乃八潟もとを
けもど。毎日むろ乃八潟へゆくもるる紙ど
いろうせんといつり。後うるる文字なり
ろろふるさ句なり。ひやうなるる。あるひい
ろいろいろ乃句ゆるどくいふものいせうくどゆく
し。ありそこのくるうかぬ角ろうどうぬやう
にるうてそよまれぬなり

同廿七日 泰吉田中月坊宿元

一 同云彩古今なるのうちの紀者乃なるを
中句よとろうどさや。彩古今。古人句まちゆ
角さうし。京極中納言いつりそれもを人

古人のよしてみるべきや
善。大てうさよう人さてぞとりてよまわりき人
姫人。伝称の奇。勅撰此人。よい相年月幻わり
さて時代をさてことい。或万葉ふるぞにわくき奇
みたるどの時代とさてくわるるり。絵巻ども年
奇よさ伝さ。他者のどの。きてうなるよ紀と
りてり。てとぞみかさて年ありとるい相ん
他者のたりるを用るるさといみや

一　同　玄記などの百首。書状いづきもよみる
きるをよみやいい外
善。大てうさそれも次第がありとみえんありまず
玄芸早春などさて。当此花乃山吹のなどある
とみえさり。定家などのよみきそひるを
内覧ぞよ

一　同
おもよどり芸此山意りかむ意くそこ
ともちずたびのしてしく。はうのきも
みまどりいく
善云ちむなわ。さてんきさくしうみといんん
なりこれをとりくく。家隆
わるしどりそこともさてぞ行く意ぬ花
乃やどる鶯べの芸るとよ隠れあり

一いづれの色をもとなる線とするか

一同云紬りとみけりと始め文字より重くて下に七文字を用ひたるを定家の所りと仰せ

所かるべきを所

若くるしかるべきを所